

白紙余談

電気がないと生きられない地での生活ぶりが改めて教えてくれる電気の真の力

◇このあいだの週末、正月休み中に適当に録り溜めていたビデオをチェックしていて面白い番組に出遭った。NHK・BSプレミアムで再放送された『謎のオーロラ大乱舞！奇跡の島』という番組だ。地球上で最もオーロラを観測しやすい場所の一つである「奇跡の島」の名はスヴァールバル諸島。北極圏にある同地は季節によって、なんと24時間連続、オーロラを観測できるといふ。しかも、研究者も滅多にみられない「赤いオーロラ」が観察できる、現状唯一の場所だという。

◇実際に撮影されたオーロラの映像はもちろん素晴らしかった。しかし、この番組を見ていて、より興味深かったのは、スヴァールバル諸島（ノルウェー領で総面積は九州ぐらい）に暮らす人々の生活ぶりだ。

◇同地の首都・ロングイェールビーンには2600人強の住人がいる。それに対し、ホッキョクグマの数は約3000頭。オーストラリアでは人間より羊の数のほうが多いとよくいわれるが、人間よりホッキョクグマのほうが多いというのは別の意味で凄い。そのため、街の郊外に出かけるときは、ホッキョクグマの威嚇用銃器の携帯が義務付けられている（観光客も含め）。

◇しかも、北極圏の最深部に位置するため、大地は常に氷河に覆われ、年間の3分の2以上が白夜と極夜という極端さ。つまり、一日じゅう日没寸前のように薄暗いか、一日じゅう真っ暗な日が、年間の70%近くも占めているということになる。

◇それ以外の日も推して知るべしで、住民の生活に人工光は欠かせない。ほぼ24時間、人々は電灯の下で暮

らしている。さらにエアコンによる暖房はもちろんのこと、生活のほぼすべてが、電気エネルギーの活用で成り立っている。

◇北極圏に限らず、電気エネルギーが現代人の生活基盤を担っているのはほぼ世界共通のことだ。しかし、スヴァールバル諸島では、電気は掛値なく「生きるための糧」「サバイバルするための必需品」なのだ。

◇さらに空気が清浄で、海はほとんどの時期が氷に覆われていることから、大気や気象、土（鉱物）、海水など、地球の生成物に関連する基礎研究の機関が、世界各国から目白押しに進出している。それらの機関の生命線ももちろん電気エネルギーだ。

◇近年では観光地としても人気が高まりつつあるスヴァールバル諸島。この極寒かつ大自然の脅威に包み込まれているような場所に、観光客が安心して訪問できるのも、電気エネルギーの恩恵があればこそだ。この地におけるエレクトロニクス（電気技術者・技能者）の存在感は、まさに社会を支えるエッセンシャルワーカーの極みといえる。

◇番組を見ながら、そんなことを考えていた訳だが、翻って近年、相変わらず続く大学や専門学校、職業訓練校、工業高校などの電気科における、定員割れ（志望者減）問題が想起されてならなかった。

◇単なる言葉の表現の問題ではない。業界全体が「人手不足ではなく志望者不足」なのだという現実を、そして「電気や電気設備の仕事の魅力」を、もう一度きちり見据える必要があるのではないだろうか。（E）